コロナと我が家の闘い

帯広市医師会
JA北海道厚生連帯広厚生病院
髙村（たかむら）　圭（けい）

●第一ラウンド

それは2022年１月14日、小学生の息子の始業式、突然ゴングが鳴った。帰宅後小学校から電話があり、“教師に陽性者が出た。息子さんが検査対象に該当するのでPCR検査を行ってほしい”と。

週末は症状がなく、月曜日に高を括って自分の勤務先に息子の検体を持っていった。まさかの連絡、“先生息子さん陽性です”。毎日一緒の布団で寝ており、観念しつつ急遽自分もPCR検査を。結果は陰性であった。しかし濃厚接触者に該当。妻と長女は息子と一緒に自宅で過ごし、自分は早期職場復帰を目標にホテル待機を選択した。息子は陽性翌日に発熱と嘔気で一時食事が摂れずやきもきしたが、対症療法数日で軽快した。

この時期は10日間ホテルで待機。元気なのだが基本ホテルに缶詰め。溜まっていた仕事を持ち込んだものの、終日仕事をする気力も続かず、横になっては机に向かう、そしてまた横になるの繰り返し。

一日にメリハリがなく、永遠に続くような気がした。楽しみである食事もスーパーやコンビニでの出来合い品やレトルト食品が主体であり、まずくはなかったが味気なかった。何日も一人で食べるものではない。

また、症状なく推移したのは良かったが、元気なのに仕事に行けず、ずっと待機していたのは本当に心苦しかった。ただそれ以上に、自分がいなくとも病院業務が滞らないという事実に正直凹んだ。大きな組織であり、いろいろな職種のサポートの上成り立っている。一人欠けて機能しないようではいけないのである。当たり前のことで、あまりにおこがましい思いであった。ただ、他人との接触がほとんどない状況で、一人で砂のような時間を過ごしていると、どうしても無力感を感じずにはいられなかった。

●第二ラウンド

それから月日は経ち2022年８月。第７波が押しよせ、十勝では連日500～700人の感染者が報告されていた。連日接触者リストをICNに作成してもらい、リスクに応じてPCR検査をオーダーしていた。金曜が終わり、くたくたになって家に帰った翌日、夜中ずっと咳込んでいたよと妻に言われた。

次のゴングは、第７波の真っただ中で鳴った。体がだるく、重い。もともと平熱は高めなのだが、熱を測ったら38.4℃・・いつもと違う。NSAIDsを飲んでも症状が良くならない。最終手段としてジクロフェナクナトリウム坐剤50mgを投入、翌日に症状は軽減した。しかし良くはならず、長男も発熱。翌日には妻も発熱し、これは間違いないと観念した。

８月15日３人の検体を出し、自宅で待機していたが、産業保健師のＯさんから電話・・・“先生週末から遡っての行動を教えてください”。遂に陽性となってしまった・・・。ただこの時は発熱・倦怠感に加え、喀痰咳嗽、嘔気もあり、正直横になりたい気持ちが強く、第一ラウンドのようにいろいろ考える余裕はなかった。妻も陽性であったが、長男は陰性であった。長女は幸い症状がなく、家族４人での自宅療養を選択した。

●第一ラウンドと第二ラウンドの違い

最初は濃厚接触者で症状なし、第二ラウンドは有症状の自宅療養。やはり症状があるのとないのとでは気持ち的にかなり違った。第二ラウンドは発症しており、その後同じ感染対策室のICNも陽性になり、自責の念に駆られた。

ホテルと自宅での待機（療養）の違いは大きかった。家族と一緒に普段生活している場所での生活はホテルとのそれとは精神的な自由度が全く異なった。ただ、自宅療養は感染者の対応であり、自宅にいながら屋外に出ることは許されず、束縛感は強かった。

第一ラウンドは毎日長男の病状について保健所から妻に問い合わせがあった。自分が感染した時は、保健所からはSMSを通じての連絡であり、その後の症状報告もネットからのMy HER-SYSからであった。

●最後に

幸い症状悪化なく、８月23日からの勤務が可能となった。今改めて思う。新型コロナウイルス感染症って何だろう。最初は未知のウイルスで、治療法もなく、基礎疾患のない若年成人でも命を落とすことがあった。

しかし今、第７波の収束の見通しがつかず、かつ行動制限をしない現状で、一体COVID-19の何に我々は困っているのであろうか。COVID-19という病気そのものの問題は当然いまだにある。ただ本当にそれだけだろうか？　一勤務医が考えて解決する問題ではないのがもどかしいが。